Commentary

＼ 先生・学校の“？”に答える ／

アントレプレナーシップ Q&A

高校の先生方を対象にしたアンケートでは、アントレプレナーシップ教育に対して、
さまざまな声が寄せられました。ポジティブな意見もネガティブな見方もあるなか、
まずはアントレプレナーシップ教育そのものを理解することが、
一歩を踏み出すための糸口になるのではないかと考え、
アントレプレナーシップに詳しい忽那憲治先生に教えていただきました。

忽那憲治先生

くつな・けんじ●神戸大学大学院経営学研究科・教授。大阪市立大学大学院経営学研究科修了。主な研究対象領域はアントレプレナーシップ、イノベーション、アントレプレナーファイナンス。共著に『アントレプレナーシップ入門 ベンチャーの創造を学ぶ』（有斐閣ストゥディア）など。

忽那先生が教えてくれた「アントレプレナーシップ」の定義・要素

1. 課題に対して前向きに向き合う姿勢
2. 自分のもっているリソースにとらわれない思考
3. 失敗を前提に行動し、失敗から学ぶこと

取材・文／笹原風花

Q 「アントレプレナーシップ」って、そもそも何ですか?

A → 課題解決に向けたマインドと行動様式のこと。

「アントレプレナーシップ」は「起業家精神」「起業家活動」と訳されますが、最近は「起」ではなく「企」の字を当てることも増えてきました。これは、アントレプレナーシップが起業する人に限らず、すべての人に求められる課題解決に向けた考え方やマインドであり行動様式であることを意味しています。また、「精神」だけでなく「活動」を伴うこともポイントの一つです。

起(企)業家的な精神・活動には、大きく3つの要素が含まれます。1つ目は、課題に対して前向きに向き合う姿勢です。「現状はこうだから仕方ないよね」ではなく、「課題を解決するために、自分には何ができるだろうか」とできることに目を向けるということです。

2つ目は、自分のもっているリソースにとらわれない思考です。自分には知識やスキル、経験が「ないからできない」という思考ではなく、「必要なものをいかに集めるか」を考え、実際に行動します。新しく知識を学ぶ、スキルをもっている人と組むなど、「こうやったらできるんじゃないか」とさまざまな手段を模索するマインドセットです。

3つ目は、失敗を前提に行動し、失敗から学ぶことです。エジソンの「私は失敗したことがない。1万通りのうまく行かない方法を見つけただけだ」という名言が、まさに言い当てています。失敗をする可能性が高いことを前提に、トライアルを重ね、小さな失敗をたくさんすることが重要です。時間をかけて入念に準備したことが失敗に終わるとダメージが大きいですが、やりながら軌道修正していく進め方なら、失敗を糧にできます。

アントレプレナーシップと聞くとハードルが高く感じられるかもしれませんが、先生方自身が、知識やノウハウが不足するなかアントレプレナーシップ教育に取り組もうとすることこそが、アントレプレナーシップです。まずは、「〜だからできない」という発想から、「どうしたらできるか」という発想に変えることから始めてみることが肝心です。

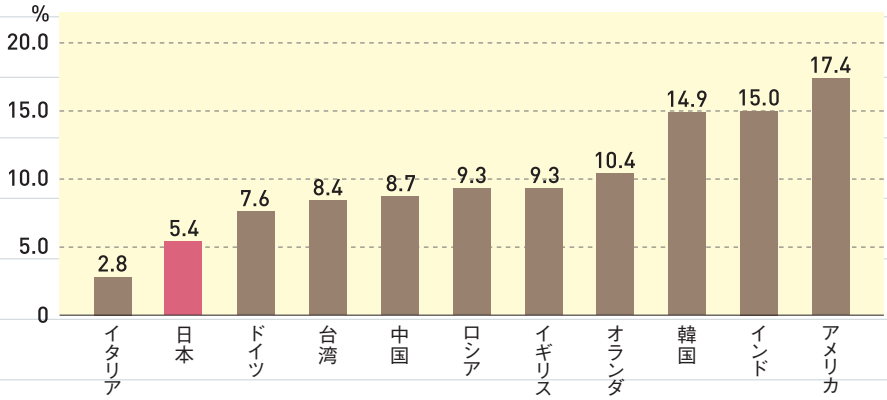
Q アントレプレナーシップ教育は、なぜ必要なのですか?

A → 人生を切り拓いていくために役立つものだから。

日本は諸外国に比べて起業率が低く、イノベーションや新規事業を起こしやすくすることが課題だと言われています。だから子どもたちにアントレプレナーシップ教育が必要…という側面はもちろんあるのですが、それは一面にすぎません。私自身は、大学生や高校生はもちろん、中学生や小学生にとっても発達段階に応じたアントレプレナーシップ教育が必要だと考えています。なぜなら、アントレプレナーシップの本質は、「どんな未来を自分の手でつくり出したいか」にあるからです。

イノベーションも発明も、発端は「こんなもの・サービスがあればいいな」というビジョンです。そして、それを実現するにはどうしたらいいかを考え、試行錯誤を重ねることが、アントレプレナーシップです。一方、子どもがやりたいことを見つけたときに、「〜がないからできない」と諦めるのではなく、「どうしたらできるか」を自ら考え、失敗しながらもチャレンジを続けることも、まさにアントレプレナーシップです。そう考えると、アントレプレナーシップ教育は一部の人に必要な「専門科目」ではなく、より良く生きるための「一般教養」であると言えるでしょう。想像力、発想力が豊かで思考が柔軟な若いうちにアントレプレナーシップを身につけておくことは、自分の人生を自分で切り拓いていくために有効なのです。

■世界各国の総合起業活動指数(TEA)



Global Entrepreneurship Monitor: GEM 2019/2020 Global Report(2020)より

Q アントレプレナーシップ教育をどう取り入れたらいいですか？

A → 失敗を奨励する空気づくりから。探究では偶発的な出会いを。

これまでの教育では、間違わないこと、失敗しないことが求められてきました。一方、アントレプレナーシップ教育では、失敗することが前提になります。まずは、失敗していいんだ、失敗から学ぶんだというマインドを、先生も生徒も共有することが大事です。多様な意見や間違いを否定しない、「わからない」という状態を「わかる」にするにはどうしたらいいかを考える、いろいろな方法でやってみる、うまくいかなかったら違う方法でトライしてみる…というのは、どの科目でも実践できるのではないでしょうか。

アントレプレナーシップ教育を盛り込みやすいのが探究学習です。おすすめは、メンバーを固定しないグループ探究です。まずは自分のやりたいテーマを考え、そこに共感してくれるメンバーと合流して、アイデアを出し合ったり、具体策を考えたりするのです。流動的で偶発的な出会いによりリソースが組み合わさって、一人では思いつかないアイデアが生まれ、一人ではできないことができるようになる。この過程を体感できれば、それはまさにアントレプレナーシップ教育だと言えるでしょう。この「共感を得る」「人を巻き込む」というのも、アントレプレナーシップの一つです。自分にはないリソースを手にするためには、それをもつ人を仲間にする必要があります。そのベースになるのが共感であり、人の心を動かす力の源になります。

アントレプレナーシップには、自由な発想で大胆なアイデアを出すことも含まれます。簡単にできて楽しく取り組めるワークを紹介しましょう。経済学者のシュンペーターは、「新しいものはゼロから生み出されるのではなく、既存のものの掛け合わせだ」と述べました。実際、ほとんどのものはくっつけ方が新しいのです。例えば「いちご＋大福＝いちご大福」など、身のまわりにはさまざまな事例があります。こうしたものを挙げたうえで、「くっつけたら面白いもの」のアイデアを生徒に考えてもらいます。発想の独自性や意外性を楽しみましょう。